

私の学生時代

歯学部
歯学科

教授 齊藤 正人



1985年、東日本学園大学薬学部に入学生、誰もがカルチャーショックを受けた音別キャンパスで寮生活を始めました。私の実家は寮から車で40分程度の釧路市西端であったため、音別に違和感がない自分は田舎者の代表のようで恥ずかしかったことを覚えています。わずか半年で音別キャンパスが閉鎖となり、当別に越してきてラグビー部に



試合勝利後の喜び風景。
後列右から2番目が私

入部しました。初体験のスポーツで、毎日生傷に耐えながら一生懸命走っていました。

翌年は家族のすすめで歯学部の1年次に再入学しました。歯学部の同級生が何人もラグビー部に入部しましたが、部活では先輩となるため居心地が悪く、そのうち折り合いも悪くなったのでアメリカンフットボール部に移籍しました。こちらでも毎日毎日、犬よりも走りました。アメフトはラグビーと違って防具があるから生傷は少ないと聞いていましたが、何も覆われていない手や足にその硬い防具がすごい勢いで当たってくるのです。たしかに生傷は少なくなりましたが、骨折や脱臼を経験しました。風邪をひいても、あばらが折れても「走れば治る」と言われ続け、そんなことを言っていた先輩のうち2名が、名前は伏せませんが、歯学部の教授にいます。

私の学生時代はバブルの真っただ中で、ディスコや合コンが非常に盛んでした。ディスコに行けば、他大学の女性や大学の先輩・



医療大グラウンドにて合宿打ち上げ時の同期との写真。
後列左端が私

後輩がたくさんいて、それはそれは楽しかったものです。しかし、そんな楽しい時間よりも、泥まみれになって走り回っていた、つらいラグビー部、アメフト部の思い出だけが今もよみがえってきます。きつと理不尽でも一生懸命になったことだけが思い出に残るのでしょうか。

折り合いの悪かったラグビー部の同級生も卒業前には仲良くなり、今でもよく会っています。その頃の先輩もなにかと気にかけてくれています。アメフト部の先輩・後輩・同期たちは頻繁に集まっています。皆それなりに役職と貫禄が付いてきましたが、同時に痛風、高血圧、糖尿病など、生活習慣病も付いてきました。お酒が入ると「走れば治る」と言っています。間違っていない。

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は齊藤正人教授と亀井尚教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

その後の学生時代

リハビリテーション科学部
言語聴覚療法学科
教授 亀井 尚



だいぶ昔の話ですが、「本誌No.65」(1992年1号)に一度登場しました。その時は、小学校から、中・高校(聖光)を経て、大学までの思い出をまとめたのですが、今回は「その後の学生時代」ということで、大学院(上智大学)での思い出をまとめたいと思います。

学部学生の頃には、自分で脚本やシナリオを書いて、映画会社に持ち込んだこともありましたが、基本的に「ことば」や「外国語」に興味があったため、大学院では「言語学」を専攻することになりました。その当時、それほど言語学の知識や素養があったというわけではなかったのですが、大学院に入って見て世界が変わりました。講義や演習以外に、自主的な輪講会、抄読会、討論会などが毎日のように開催されていま

した。私も統語論、意味論、日本語学、応用言語学などの部会(セミナー)に属していましたが、毎日のように発表や抄読のノルマがまわってきました。1年経った頃には半数近くの学友が大学院を去っていきました。このような環境の中で悪戦苦闘するうちに、なんとか自分がやりたい理論や研究テーマも見えてきたと思います。

指導教授の先生方もとてもユニークでした。例えば、金田一春彦先生。言わずと知れた日本語学の大御所ですが、行きつけのそば屋が近くにあって、そこの2階を借りてよく議論をしました。穏やかな語り口とは裏腹に、研究に対してはととても辛辣(しんらつ)でした。レコード大賞の審査もされていたので、審査の裏事情もよく伺いました。ハインツ森岡先生。ドイツ人の指導教官で、落語や講談など日本の話芸を音声学的に研究された先生でしたが、新宿や上野周辺の寄席に同行させていただきました。ところが、

大学があった四谷からの移動手段は全て徒歩でした。歩くことが好きな先生で、片道1時間程度は普通でしたが、同行するのは一苦勞でした。最後に、森岡健二先生。「国語辞典」の編纂(へんさん)など日本語の語彙(ごい)・文法研究の第一人者ですが、とてもお酒が強く宴席でのお付き合いが大変でした。ただ、人情味の厚い先生で、私が「新村出賞」を受賞した際は、真っ先に祝福の電話をいただきました。

大学院での経験から言えることは、「苦悩しなければ、研究者への道は開かれない」といったことかもしれません。参考になりましたか。



東京で開催された「音声学世界会議」の部会でのプレゼンテーション場面ですが、修士2年で初めての国際会議ということもあってとても緊張しました。